



LA NOUVELLE

N°14

PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 藤倉洋一 (昭45)
2015.4.1 発行

第20回サロン仏友会

去る11月22日、恒例のサロン仏友会が本郷サテライトで開催された。出席者は61名で会場いっぱいのにぎわいとなった。

今回の講師は、昭和49年卒の稲本隆司氏。IBMを退職後、5年前から江戸東京博物館でボランティア・ガイドをされている。講演は、江戸の話題を中心に自分も楽しみながら解説する稲本流の軽妙な語り口が大変好評で、参加者は同氏の世界に引き込まれるような感じで熱心に聞き入っていた。

今回の懇親会では若手登録会員も目についた。参加者全員がボジョレ・ヌヴォのグラスを手に、積極的に親睦を深めることで昨年以上に盛り上がり、和気あいの雰囲気となった。先輩OBの方からも、「若手の参加者も徐々に増えてきている感じで嬉しい。リレーのバトンはしっかり渡して行ってほしい」との激励のお言葉をいただいた。例年にも増して、大勢の助っ人の皆さんにも支えられ、大盛況裡に終了できたのがありがたい。以下は、稲本講師自身によるエピソード的な投稿で、講演時のトークを彷彿とさせる雰囲気を味わっていただければ幸いです。(中村日出男)

江戸東京博物館でのガイドボランティア活動と歴史を知る楽しさ

稲本隆司 (昭49)

とある経緯から同期の中村さんから藤倉会長をご紹介頂き、昨年11月の第20回サロン仏友会で「大江戸四方山話～西洋かぶれからの回帰～教科書には出てこない徳川家の人々のお話など～」の講演をさせて頂きました。時間も限られ余り多くをお話できなかったのですが、それなりに喜んで頂けたのかなと勝手に自賛した印象を持っています。この日の講演は「もっと聞きたかったな」と思いつきながら終えるのが一番難しいところ、私がボランティアで江戸東京博物館(以下「江戸博」)で行っている展示ガイドでも同様で、お客様に100%満足して頂いてはガイドとしてはまだ及



懇親会場の風景

点に達していないのだと思います。お客様にはガイドの後、「あのことを自分でももっと勉強してみたい、話に出てきたあの場所に行ってみたい、歌舞伎や浮世絵を観てみたくなった・・・」という「歴史を楽しむ旅」に一步踏み出して頂き、日本の奥深い文化や芸能・美術・工芸などに目を向けて頂くことに繋がって欲しい、きっとそこには沢山の驚きと感動と素晴らしい出会いが待っているのでは、と常々思っています。

江戸博では190名近くのガイドボランティアが曜日別・言語別(日英仏独西中韓。半数が外国語担当ですが日本語ガイドもします)に構成されていて、私は「日曜班・英語」です。女性の割合が高く2:1、最高齢は確か日本橋生まれ・育ちのチャキチャキの江戸っ子80歳後半の方が現役で頑張っています。「家でブラブラして惚けるよりよっぽどいいやね」と江戸弁で啖呵を切りながら。年間100万人を超えるご来館者があり(これって凄いなのですよ)、ガイドのチームで年間1万組・4万人のご案内をしています。海外の方向けのガイドも多く日本語:外国語は6:4でしょうか。私もこの5年で50カ国近くからの300組以上のお客様のご案内をしています。米海軍女性将校、パキスタン国立国防大学の教授グループ、在日インド大使とご親戚一同、などなど、お国柄も色々で、ヨーロッパの方は落ち着いて物静か(イタリアを除いて)、いつも陽気なアメリカ人、アメリカと一緒にしないでと言うカナダ人、底抜けに明るく楽しい南米の方、笑顔がもう少し欲しいイスラエル人、英語が難

解なインド人、女性はそのエレガントな容姿・雰囲気です。パリジェンヌとすぐに分かりますね、本当に洒落です、主張の強い洒落ではなく抑えた洒落とでも言うのでしょうか。海外の方は国を離れる前にネットで調べて知った、旅行ガイドの勧めで知った、知人(来館経験のある日本人・知人)の薦め、という「決め込み」パターンに加え、日本の友人家族や仕事先が付き添いで来るケースも多いです。付き添いの日本人の方で興味深いのは例えば「玉川上水」をご説明しますとそれを聞いて「ええっ! そうだったのですか、知らなかった!」と驚かれることがよくあります。すかさず「そう言う私もガイドを始める前は知らなかったのですよ、歴史は楽しいですよ」とお慰めしつつ、暗に「もっと学習して下さいね」という気持ちを込めます。

子供(日本人の場合が多いですが)向けは少し様相が変わります。小学3・4年生はまだ日本史を勉強していませんので早い内に歴史を好きになって欲しいですね。「寛永通宝」の中心の穴は何故四角いのかを考えて貰います。すぐに答えは言わずに考える楽しさを知って貰いたいのです。少しづつヒントをあげて、例えば写真を見せて「鋳型を作って一回に沢山造るんだけど、これって何かに似てない?」・・・「そう、プラモデルの部品。部品は一個一個折って使うよね、そうすると部品に何かが残って困らない?」的に進めます。勿論最後には理由が分かるのですが、答えに近づく過程で子供の眼が段々と輝いてくるのが感じられるのです。(これは実話で)一緒のお父さんが「ええっ! そうなんですか、知らなかった!」と興奮。お父さん、お子さんの前なので黙ってればいいのに(笑)、新しいことを知った時は子供も大人も同じように楽しいということでしょうか?とところで、銭の穴は何故(丸でなくて)四角いのでしょうか? 皆さん、お考え下さい、物事には必ず理由があります、正解は・・・。

この会報誌が届くのは桜前線北上真最中の頃でしょうか? 江戸博は開館以来初めての大型リニューアルを終えリオープンしたばかりの頃です。皆さんにも是非とも新しい江戸博にお寄り頂きたいと思っております、そしてその際はボランティアガイドをご依頼下さい。勿論私で宜しければ喜んでご案内しますので併せてご検討下さい。私のメールアドレスは次の通りです。いつでもお声掛け下さい。takashi_inamoto@yahoo.co.jp

函館とフランスの友好のために —函館日仏協会とともに—

河村昌子 (昭61)

仏友会の皆様、はじめまして。旧姓・金谷と申します。卒業後はアメリカ系金融カード会社に5年間勤務、結婚を機に退職、その後、生まれ故郷の函館に戻り、現在は北海道教育大学函館校等で英語講師、その他、道新文化センターや個人レッスンで初心者向けのフランス語講座の講師、また英仏の通訳・翻訳等もしています。



グローバル化が声高に掲げられる昨今、各大学でも英語の比重が高くなり、フランス語を教える学校がますます少なくなっています。今まで長らくフランス語を教えてきた函館日百合学園高校でも2015年度からフランス語の授業の廃止が決まり、非常に残念に思っています。

私は函館日仏協会副会長も拝命しています。ここ数年は「無料映画鑑賞会」を担当し、100本以上ある私物のDVDの中から私の気に入った映画を、年に3回ほど会員の皆様にご紹介しています。先日「モンテニュ通りのカフェ」を上映いたしました。

函館日仏協会は、長年に渡り函館を中心に活動されたフィリップ・グロード神父のもと、函館とフランスの友好関係を広げようと1982年に創立されました。老舗レストラン「五島軒」に事務局を構え、年数回、五島軒でフランス料理とワインを楽しむ例会を開いています。もちろん毎年11月にはボジョレ・ヌヴォの会も開かれます。

例会ではシャンソンショーや、フランスにまつわる講話なども企画されます。当会名誉会長関口氏は、函館とフランスの関係史に造詣が深く、毎回興味深いお話を聞かせてくださいます。また会員向けにフランス人会員による会話教室も開かれています。

さて函館は、1859年に正式に国際貿易港として開港する以前からフランスと深い関わりがありました。1855年カムチャッカに向けて日本海を航行していたフランスの軍艦・シビル号とコンスタンチヌ号が、乗組員の病気の治療のため上陸許可を箱

館奉行に求めたので、まだ和親条約を締結していなかったにも拘らず、人命を優先した当時の奉行は独断で上陸許可を与え、実行寺にて病人の治療を施しました。残念ながら亡くなった6名の乗組員達は、函館山の麓にある外人墓地に埋葬されています。後に故・グロード神父のデザインによる日仏親善函館発祥記念碑が、実行寺内に建立されました。現在の五稜郭公園は、その当時滞在中のフランス人から学んだ設計技術を元に星形城塞として築かれたものです。

2008年5月に、仏海軍測定艦「デュピュイ・ド・ローム号」が函館に寄港し、函館日仏協会を代表して会長と私が昼食会に招かれ、艦内にてボリューム満点のフルコースをいただくという貴重な体験をいたしました。その後の外国人墓地での追悼式典と一緒に乗組員数名とその夜に飲みに行くことになったのですが、「飲み放題」のシステムを伝えた時の彼らの喜びようはハンパではなく、お店が潰れるかと思う程に飲みました。翌日、彼らのうち3名が私のフランス語講座に来てくれて、受講生達と和やかに触れあう機会を持つことができたのも今ではとても良い思い出です。

いつか仏友会総会にもサロン仏友会にも出席させていただきたいと思っています。皆様も函館に来ることがありましたら、ぜひお声をかけてください。canta@f4.dion.ne.jp

「パリのテロ事件」関連シンポジウム開催さる

2月17日(火)夕刻、本郷サテライトで「国際社会はテロリズムにどう対応するのか」と題したシンポジウムが、本学の国際関係研究所(渡邊啓貴所長)主催で開催された。

講師は、防衛大学の宮坂直史教授、本学の青山弘之教授、渡邊啓貴教授(兼総合司会)。それぞれ「国際テロリズムの時代」、「シリア反体制武装勢力の同質性と異質性」、「先進国家の社会統合テロ」についての報告があり、その後質疑応答となった。

1月7日に発生した、風刺週刊誌『シャルリー・エブド』のパリ本社襲撃などの一連の事件を受けて行われたが、3階会場には入りきれないほどの来場者が詰めかけ熱心に聴き入った。国際社会の喫緊の課題となったテロを深く掘り下げ考える意味で3時間近く続いたこのシンポジウムは時宜を得たものであった。(藤倉洋一)

第20回仏友会総会のお知らせ

日時: 2015年4月25日(土) 午後2時~5時
午後2時~総会、2時20分~講演
3時50分~写真撮影&懇親会
会場: 大手町サンケイプラザ 301・302号室
(東京メトロ大手町 E1出口)
講師: 藤原作弥氏(昭和37年卒) ジャーナリスト
演題: 「李香蘭の思い出」



氏は、仙台出身、時事通信社に入社後、経済部記者として海外を含め多方面で活躍、1998年から2003年まで日銀副総裁を務められた。仏友会では、2001年の仏友会総会に続いて2回目の講演となりますが、今回は「李香蘭」にスポットを当てます(李香蘭こと山口淑子さんは昨年9月に逝去)。作家としては、1983年に『聖母病院の友人たち』で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞、1987年に山口淑子さんと共著で『李香蘭私の半生』を上梓されています。李香蘭波乱万丈の生涯を書くにあたってどのように取り組まれたのか、平和の願いを込めて語っていただきます。

参加費: 5,000円
同時に、2015年度分通信費1,000円も受け付けます。
申込み: 4月10日(金)迄(70席)
メールアドレスの登録会員にはe-mailで、それ以外の登録会員には往復はがきでご案内しています。
申込み先: 藤倉洋一
fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp
Tel/Fax 048-822-4540
勝亦杏子
anzuko@k08.itscom.net

《パリ便り》

女性の就労を支えるフランスのヌヌたち

牧 陽子 (Pr 平6)

初めまして。ペルシア語学科卒業の牧陽子と申します。外語大で第二外国語として始めたフランス語、ひいてはフランスに魅かれ続けてはや20年余。2年間のフランス留学と、日本の新聞社でのジャーナリストとしての経験を経て、現在は一橋大学の博士課程で、フランスの家族政策や女性の就労、ケアの問題について研究しています。

平日の公園に集う、アフリカ系のヌヌと、白人の幼い子供たち。パリや郊外ではおなじみの光景です。夏には、黄色、赤、緑の、鮮やかな民族衣装をまとった女性もいます。地方では、主に白人のフランス人女性が子供を連れていますが、やはり自分の子ではありません。彼女たちは保育園ではなく、子供の、もしくは自分の自宅という、「家庭」で子供たちを保育しているのです。こうした女性たちや、彼女らに子供を預ける親、そして家族政策のあり方が、私の調査の対象です。

このテーマに関心を持ったきっかけは、夫のパリ駐在に同行し、現地で2005年に長男を出産したことでした。折しも日本は、出生率が過去最低の1.26を記録した年でした。調べてみると、フランスの出生率は2.0近く。しかも出産を経ても仕事を続ける女性が多い。なぜ、どのように、「仕事も家庭も」が可能なのか。その謎に迫るため、34人の女性にインタビューをし、労働環境や母親観など、日本との違いを『産める国フランスの子育て事情——出生率はなぜ高いのか』(明石書店 2008年)で紹介しました。

大学院での研究は、その延長線上のテーマです。女性が仕事を続ける上で、第一に問題になるのは日本もフランスもケア(保育や介護、看護)です。欧米でもケアは概して、男性より女性の問題です。アングロサクソン発の「ケア」という言葉は、こうした問題を包括的に扱う概念として、日本でもフランスでも研究者の間で定着しています。

私の研究テーマはこうしたケアのうち、子供が生まれたら、女性が仕事を続けるか専業主婦になるか、すぐに問題になる「保育」です。フランスの家族政策は多様な支援をしていますが、保育については、必ずしも親の希望がかなえられているとは言えません。親の希望の多くは保育園なのに対して、実際に子供たちをみているのは、ヌヌたちによる家庭での保育だからです。

行政の認定をとって、自宅で4人までの子供を預かる保育ママ(assistantes maternelles)と、資格なしで子供の自宅で保育するヌヌたち(auxiliaires parentales)。どちらも日常会話ではあまり区別せず、nourriceやnounouと呼ばれます。いずれも親が雇用主になり、労働契約を結びます。個人間でのこうした契約はどのように機能しているのか。フランスの親たちは、希望とは違う保育をどう受け入れているのか。また、保育ママやヌヌは、どのような人たちなのか。こうした疑問から、調査が始まりました。

日本では、他人に子供を預けるなんて、あまり考えられないことかもしれません。ましてや外国人に預けるなんて。ですが、保育については、日本でも待機児童を解消するため、保育ママの積極活用が行われつつあります。保育ママは日本にもある保育方法です。また、外国人による看護は、すでに一部で始まっています。フランスの経験は、日本に何を示唆しているのか、模索しているところです。



フランス語劇リハーサルを観て

藤倉洋一 (昭45)

自己紹介を終えると、語劇の代表である橋爪梢さんから、いきなり分厚いフランス語と日本語の台本を渡された。「Echanger(とりかえばや)」である。

外語祭を約1か月後に控えた10月20日(月)午後、府中の大学キャンパスにあるプロメテウス・ホールを金澤脩介副会長(昭43)と訪れた。昨年に続いて、語劇本番とサロン仏友会がバッティングしてしまったため、応援を兼ねた事前見学である。

代表から、今年のフランス語科の2年生は59名で男女比はおおよそ1:2であること、うち舞台に立つのは約20名で、他は大小道具、照明、音響効果、衣装など裏方として汗を流していること、衣装は中野の劇団から一部借用可能になったことなど一通りの説明を受けてから、リハーサルに臨んだ。

そもそも、今年のフランス語劇を行うにあたって、2年生全員にアンケートをしたところ、「日本の古典もの」と「恋愛もの」を希望する声が一番多かったとのことで、その意見を盛り込む形で「とりかえばや」からストーリーをとり、17世紀の貴族社会に舞台を設定するオリジナル作をコミック風に仕上げたそう。かつてない創造的試みといえる。

舞台を見学した限り、学生たちのフランス語の滑らかさはまだまだ不足していると感じられたが、これもちかちかフランス人先生6人に依頼して発音の特訓をするということであった。授業の合間を縫っての練習なので、全員が揃わず代役を立てて練習している場面も多かった。一人一人真摯に取り組む姿勢が遅く、全員でこの作品を仕上げたいという意気込みがほとぼりしているように感じられた。

リハーサル後、ホールで、30名近い2年生に仏友会について簡単な紹介を行い、応援していることを伝えた。また、お祝い金を手渡し、全員で記念撮影(=写真)をしようとしたが、授業に遅れまいと約3分の2が教室に戻って行ったため、写真には全員が収まらなかったのは残念であった。その後、安藤英里香監督、森本萌助監督としばらく歓談した。過去に語劇に携わった者としてついつい昔話をしてしまったが、気持ちよく耳を傾けてくれたのは有難かった。彼女らの目の輝きが美しく、青春を謳歌している一端を垣間見ることができ、元気をもらった気がしたものである。

11月22日の本番を観られないのは本当に残念であるが、後日DVDで観賞するのを楽しみにしたいと思う。誰か代わってもらえるといいのだが・・・まさに「とりかえばや」である。

(10月20日記)



ベトナム戦争と私

松本伸夫 (昭38)

今から50年前の1965年は、日本のジャーナリズム史上、画期的なベトナム報道で幕を開け、反戦、反米ムードを盛り上げた。64年8月のトンキン湾事件で米軍機が北ベトナムの海軍基地を初めて報復爆撃して以来、南ベトナムに限定されてきた戦争はベトナム全土に一気に拡大する兆しを見せ、65年2月7日の米軍機の北爆開始で、戦争のエスカレーションは避けられないものとなったのである。タイミングよく1月から毎日新聞に連載された「泥と炎のインドシナ」の出版や週刊朝日では、作家・開高健の「ベトナム戦記」の連載が始まった。またフリーのフォト・ジャーナリスト、岡村昭彦の「南ヴェトナム戦争従軍記」が新書版で出版され、ベストセラーになっていた。

米軍の北爆開始によって日本国民は、初めてベトナム戦争に巻き込まれるのではないかとという深刻な危惧を抱き、日米安保条約というアメリカの傘の下での平和に不安を感じ始めたのである。ベトナムでの戦闘作戦行動に沖縄を含む在日米軍基地からB52戦略爆撃機が出撃、海の向こうの戦争に巻き込まれる危険が身近に感じられた。個人レベルの自発的な反戦運動「ベトナムに平和を!市民連合」(ベ平連)が評論家・鶴見俊輔、作家・小田実らの呼びかけで組織され、アメリカにベトナムからの即時撤兵を要求する初の反米抗議デモが行われたのもこの年の4月のことである。

ベトナム問題についての読者からの投書が殺到した新聞社では、競ってサイゴン支局を開設。私のような63年入社戦争初体験者まで、ベトナムの戦地に特派員として送り込まれ、記事を通して米国の戦争拡大政策に異議を唱えたのだった。「安保で死んだ新聞はベトナムでよみがえった」と言われたのをはつきりと覚えている。

ベトナム戦争は、世界中のジャーナリズムが検閲なしに自由に取材できた初めての戦場だった。南ベトナム米援助軍司令部(MACV)発行の身分証明書さえあれば、日本人でも少佐待遇で米軍や政府軍からジープ、ヘリコプターの便宜供与を受けて、護衛兵付で好きなところへ自由に行けた。このため第二次世界大戦や朝鮮戦争に従軍した老練記者から、ベトナムで戦闘経験のある元GI兵士の米軍記者や戦争をまったく知らない日本の新聞記者まで、多い時には6~700人のいわゆる西側ジャーナリストが、武器こそ携帯しないが、兵隊そっくりのカーキ色の迷彩服(日本製)をまとっての前線取材。当然のことながら身の危険は伴い、交戦に巻き込まれて戦死したケースはさすがに稀だったものの、ヘリコプターの墜落や地雷に触れてベトナムで命を落とした戦争特派員・有名カメラマン(例えば沢田教一氏)は45人、行方不明者は18人(1965~75年)にのぼったのである。(特定非営利活動法人 JHP・学校をつくる会常任理事)

編集雑感

●今回初めてフランス語以外の語科出身の牧陽子さんからパリ便りが、また函館の河村昌子さんから、フランスの香りのする現地の逸話が届いた。仏友会の「輪の広がり」を嬉しく実感中。●中村昭彦さん(昭31)が纏められた外語祭語劇「記録版セット」(DVDと和訳付台本)を寄贈頂いた。多大なご尽力に感激。学生熱演の「美女と野獣」(2012)、「シラノ・ド・ベルジュラック」(2013)を鑑賞ご希望の方はご連絡下さい。

昔日の青春 佛友會々報

80年のタイムカプセルを開ける 9

坂井英俊 (昭40)

これは斎藤正直氏、昭和10年2月刊への寄稿である。
<若い人々から就職について相談を受けます。何が望みかと訊ねると「何でもいいから」といふ返事をききます。口さへあれば何でもいゝといふ言葉をきく時一種悲壮な気がすると同時に、もし、本当にその人が本心からさういったのなら少し困ると思ひます。何でもいいという人は、実際は何にも役にたたない存在です。「僕はこれがやりたい。だが、さういふおあつらへ向きのことがないから、何でも当分やってみよう」といふのであってほしいと思ひます。(就職先では)極く平凡な仕事に堪能であることが非常に重要なのです。松尾邦之助君は「俺でなくてはこの仕事はできない」といふ自信を持って巴里で活躍してあります。渡辺紳一郎君は東朝で「俺でなくて、俺の仕事が誰に出来る?」といふ勢で働いています。又伊藤龍君は目下、全朝鮮の鉄道の総取締りをしてあります。スマートな優形の紳士ですが、やはり誰にも負けない、確固たる信念をもって働いてあります。彼らは必ずしも在学中、最も良き生徒ではなかったが、彼らの未来は洋々としてあります。たしかに彼らの在学中は学校以外「何か」を身につける為に努力してあります。果たしてこの「何か」が何であったのかはどうかは知ることはできませんが、ともかく「何か」を得た。そして今日の彼らを築いてあります。在学諸君に、この点をよくお考へ願ひたいと思ひます。>とあるが、

このままが現代に通じる内容であり、後輩を思いやる肉声が直に聞こえてくるかのようである。戦時一色の荒々しい世情の陰にも、現代の我々と変わらない青春がつつましく営まれていたことがよく実感される寄稿である。

このころ2名の日本人記者が殺害された成都事件(2月24日)があり、2日後には2・26事件が起きる。当時の日本は10年毎に戦争を繰り返しており、国民はなすすべもなくそれに翻弄されていた。軍は国民の生命を、そして精神をも、軍事的必要のみから支配しようとした。長野県教員一斉検挙(教員赤化事件)、宮城前で全国小学教員精神作興大会、出版法改正(皇室の尊厳冒瀆・安寧秩序妨害の取締り)、文部省思想局設置等々と枚挙にいとまがない。しかしあの滝川事件下、正義感に燃える京大生たちは「ここはお江戸を何百里、離れて遠き京大も、ファッションの光に照らされて、自治と自由は石の下」などと落書きして嗤ったという。焚書坑儒・天安門事件を引き合いに出すまでもなく、自由自治をうたう学者や学生は国家権力にとって、常に不倶戴天の敵なのである。

さて、滝村立太郎先生は鷲尾・増田先生らと並ぶ高名な外語の碩学で、学生たちにも畏れ慕われていたという。寄せられた「年末及び年頭の所感」によれば山田参詣を計画し、一同僚に其の旨を話したら、その人はそれまでに(私が)一度も参詣しなかったかどを以て、私を非国民呼ばはりして教官室を吹聴して廻った。私は背に冷や汗をかいた。恐らく顔は赤くなったことと思ふ。で参詣は是非行ふことに意を決した。(略)五十鈴の流れに手水をつかひ、益々登りゆくと、や

がて拝殿に着ひた。(略)指定の場所で参拝したが其時「何事のおはしますかは知らねども唯ありがたさに涙こぼる」と云ふ古歌を思ひだしたばかりであった。両眼には涙が滲み出た。(略)漸く非国民の汚名を除去することの出来た喜びは何に譬へんか。有り難く守札を頂いて引退がった。

これは以前にも引用した下りである。ありし日の滝村立太郎先生が、けだし滝村先生ほどの学匠が感涙にむせぶほどの「威光」にうたれたという当時の「皇国史観」には、なんとも不可思議な清烈パワーが宿っていたのであり、その威力は平和愛好者昭和天皇を押し軍部を煽って戦争を発動し、国民の死を美化することさえできたのである。今の若者たちには度し難い昔話かもしれぬが、それは覚めた理屈・打算ではなく、長年の歴史からすでに肉化していたある日本民俗の通性により、ことに臨んでは瞬時に「理屈を超えた国民了解」が成り立つようなものだったようにみえる。新渡戸稲造や三島由紀夫ならそこを明快に説明するのであろうか。当時は「自決・特攻隊・万歳突撃・七生報告・悠久の大義」という極限悲劇のすべてが、「戦争の美学」へと当然のごとく昇華されていた。(ちなみに「非国民」という言葉は昭和14年から使われたとの「定説?」があったが、この会報は昭和9年2月刊であり、ささやかながら歴史が一部修正?されたことになる。)(次回へつづく)

《前号の連載回数表記に誤りがありました。お詫びして訂正します。正しくは第8回です》

